

---

# **赤と青の双眸を持つ一角獣**

桜椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の双眸を持つ一角獸

### 【Zコード】

Z0224BA

### 【作者名】

桜椿

### 【あらすじ】

国家解体戦争から数十年。人々は汚れた大地を捨て、空にその生活圏を広げた。

地上に残されたのは、国家解体戦争によつて國家の代わりに生まれた企業と、アーマード・コア「ネクスト」を駆るリンクス達であった。

圧倒的な個々の戦闘力を誇るネクストを恐れ、企業は傭兵管理機構カラードを生み出す。そのカラードに、青い瞳を持つネクストが現れる……

## 赤と青の双眸（ホッドマイ）の少年（前書き）

アーマード・コア フォーアンサーの一次創作です。  
あまり知識が無いのに始めたので、原作との矛盾が出たら許してください  
ださい m(—\_)m

## 赤と青の双眸（オッドアイ）の少年

「はあ……、はあ……！」

時間帯は夜中だらうか。暗闇の中、短い黒髪を揺らし、包帯で右目の視界を塞がれつつも、なんとか見えている青い瞳を頼りに、少年は縛れる両足を頑張つて動かしていた。

「逃がすな！！」

「どこだ！？被験体A - 27 !!!」

大人達の罵声が、疲労で倒れそうになる少年に活力を与える。あの罵声から逃れたい。早くここを立ち去りたい。その一つの思念だけが少年のある場所へと突き動かす。

「はあ、はあ……」

少年は足を止めた。目的の場所に辿り着いたからである。そして、目の前にある人の形をした物体を見上げる。

アーマード・コア「ネクスト」。それが、少年が探し求めていたものである。

「これで……、自由になれる……」

少年は、慣れた様子でネクストに乗り込む。そして、一つ一つの電源を入れる。電源が入れられたことにより、ネクストは起動する。機動力重視に設計された細身の漆黒のフォルム。そのアイセンサー

の光は、少年の瞳とは正反対の深紅色であった。

「貴様！試作機に！」

「撃て！射殺許可は出てる！」

「ノーマル部隊を出動させる……動きくらいは止められるハズだ！」

！』

ネクストに乗り込んだ少年に向けて、大人達はマシンガンを撃ち込む。だが、所詮は対人武器。ネクストの装甲の前では弾かれるのが目に見えている。

少年は、ゆっくりとネクストを外へ向かわせた。

\*

「ぐつ……」

少年は、外からの衝撃に思わずたじろいだ。なぜなら、少年が出了場所は、高度7000mの高さに浮遊しているプラットホーム、クレイドルの甲板であるからだ。大気の流れが衝撃として少年とネクストを襲つたのだ。

「早く……、しないと……」

「動くな！被験体A-27！」

突如聞こえた声に、少年は弾かれたようにコクピットのレーダーを確認する。気付くと、ネクストの周囲にはノーマルに囲まれていたからである。

変われよ……

少年は、自分の内側から聞こえる声に驚愕する。  
(嫌だ！殺してまで助かりたくない……！)

なに甘つたれたこと言つてんだ？見ろよ。アイシッハは、「俺たち」を殺しに来てるんだぜ？

(でも……)

安心しろ、すぐに終わらせてやるよ……

少年は、もう一人の「自分」に身体を託した。

\*

「動きが止まってる？」

「今だ、取り抑えろ！…！」

ノーマルの一機が、漆黒のネクストに向かつ。

その瞬間だった。

たつたその一瞬で、ノーマルの胴体は両断されていたのだ。  
誰もが驚愕した。いつの間に、誰が……

いや。相手はすぐに判断出来た。漆黒のネクストだ。立ち止まつていたネクストが、右腕のレーザーブレードを振り上げていたからだ。

「コイツ！…！」

「待て！クレイドルに当たるー！」

戸惑いが命取りなのは、正にこの事。クレイドルを傷付けてはならないという思考に注意を反らしてしまい、漆黒のネクストに胴体を薙ぎ払われてしまった。

漆黒のネクストは、ノーマルが塞いでた場所に通路を作り出し、一気にそこに飛び込んだ。

「馬鹿め、もう逃げられないぞ！…！」

ノーマルがマシンガンを構える。なぜなら、ネクストはクレイドルの翼に立っているからだ。もう逃げ場はない。幸い、相手は射撃武器を持っていない。こちらが優勢なのは目に見えている。

ククツ、ハハハ……！

そんな絶望的な状況であるハズなのに、笑い声が聞こえた。少年の声だ。

笑わせんなよ！それで勝つつもりかよ！？ああー！？

まるで、人が変わったのかのように、少年の口調は荒々しくなっていた。否、

その「変わった」事が原因で、大人達は少年を殺さざるを得なくなつたのだ。

よく聞け、屑ども。俺は、ぜつてえにテメエらを潰す！この、アレックス・レイヴアンダート様がなアー！

その一言を置いて、漆黒のネクストはクレイドルの翼から飛び降

りた。

「なつ！？」

「放つておけ。助かりはしない。」

大人達は、多少後ろ髪を引かれる思いで撤退した。

一人の少年が、ネクストを強奪してクレイドルから脱走した。この事は、物語が始まる約14年も前の事である……

## 赤と青の双眸（ホッドマイ）の少年（後書き）

いきなりクレイドルから始めました。  
これからもオリジナルに走る事もあります……

## カラード、入隊（前書き）

タイトル通りです

## カラード、入隊

荒野に、一体のアーマード・ニア「ネクスト」が身を屈めていた。戦闘中ではないからか、そのコクピットは開いていた。漆黒のカラーリングに、ブルーのサブカラー。その要塞の様な姿は、重量一一脚型の特徴である。

「……」「

「クピットの中には、セミロングの黒髪を持ち、前髪をバンダナで上げ、更には右目に眼帯をしていた。そして今、青年は身体をシートに預けて趣味の音楽鑑賞に浸っていた。

「ーンー！アーネー！」

と、一人の少女が漆黒のネクストの脚部の関節部分から顔を出し、青年を呼ぶ。長い茶髪を高い位置に一つに結び、額に鉢巻きを結んでいる。そして、年頃の少女特有の大きく丸み帯びている緑色の瞳を持つ少女だ。

「ちゅうとーー！アーネー！  
「ンだよ、うるさいこな……」

少女は、青年がいるコクピットに身体を半分乗り込みます。そして、青年はめんどくさそうに返事をし、イヤホンを外した。

青年の名は、アレックス・レイヴァンダート。どこにも属していなフリーの傭兵である。尚、アレンの呼び名はあだ名である。そして、少女の名はレナ・アウインダー。アレンのネクスト、ブルーア

イズの専属整備士である。

二人は互いの役割を果たしながら生活をしていたが、この御時世、とうとうその体制では危うくなつてきただのである。

「早くオーメルに行こうよー！」

「ブルーアイズは？」

「バツチリよ。」

アレンは、フリーの傭兵として活動していた時に、企業連合のオーメル・サイエンス・テクノロジーからスカウトを受けたのである。背に腹は変えられず、アレンはそのスカウトを了承した。そのオーメルに向かう途中、アレンの愛機である漆黒のネクスト。ブルーアイズが不調をきたして、レナに整備をしてもらつていたのだ。

「じゃあ、行くか。」

「うん。」

レナがブルーアイズのコクピットから降りたのを確認した後、アレンはコクピットハッチを閉めた。アイセンサーのカメラから、レナが旧型の車に乗るのが確認出来る。

そして、車の速度に合わせてオーメル社に向かつた。

\*

「ここが……」

「オーメル……」

二人は驚愕していた。どうにか、オーメル敷地内に入った二人は、オーメルの輸送車と合流し、輸送車に運んでもらつてオーメル本部に着いたのである。

「さつすがー 設備充実してるー」

最新設備の集まりに、レナは目を輝かせた。まるで、探し求めていた宝の山を見付けたような表情だ。

「変な御嬢さんですね。」

「コイツ、そういうのに目が無くて……」

ちょうど、輸送車の運転席で運転している眼鏡の男性が呟く。尚、隣の助手席にはアレンが、後ろの一列にレナが乗っている。恐らく、後ろの一列は客人用。あるいは、リンクスが重症を負った際の緊急簡易ベッドなのだろう。とりあえず、運転席、助手席の後ろに人が寝転がって少し足を曲げるくらいの長さのシートがあった。そのシートの上で、レナが左右の窓に向かつて右往左往しているのだ。

「すみません、うるさいくて……」

「いえ。むしろ良いですよ。あれぐらいバカな娘は調……、羨のしがいがある。」

明らかに調教と言おうとした男性に、アレンはあえてツッコミをしなかつた。理由は簡単。面倒だからである。

「えーっと、名前は……」

「アレックス・レイヴアンダートだ。連れは、レナ・アウインダー。」

「アレックス様ですか。私は、エクリプス・シルヴァーナ。以後お見知り置きを。」

眼鏡の男性、エクリップスの淡々とした質問に、アレンは答えた。

「貴方のネクストは、このハンガーに置いておきますので、登録をしてきてください。」

「りょーかい。レナ、行くぞ。」

エクリップスが輸送車を止めて、アレンを降ろす。未だに興奮の中にあるレナは、アレンが引きずつていくことにした。

\*

登録はえらく早く終わった。ただ単にアレンが話を聞き流していただけかもしねりないが。

企業に登録し、カラードへ配属となる。企業に登録しても、アレンはまだ入り立て。そのため、他の企業からの依頼も受けられる仕組みとなっている。重なる業務によっては、他の企業に飛ばされたり、正式に登録した企業のリンクスとなるか。正に、自分の結果次第となつていて。元々、アレンは企業云々のじがらみは気にしないようだが……

「アーレン！カラードに行こ！オペレーターの人いるんだって！」

レナは、ぼーっとしていたアレンの手を引っ張る。アレンは、引っ張られるままにレナに着いていった。

\*

そして、カラード本部。傭兵達の大事な仕事場だ。待ち合わせ用のカフェや、娯楽施設、ショッピング等も充実している。傭兵、依

頼人、オペレーターとの信頼関係を築くためなのだろう。

その中で、最もシンプルな待ち合い室にアレンとレナはいた。待ち合い室は殺風景で、置いてあるのも長椅子とテレビだけだ。テレビはおそらく、依頼の説明等に使われるものだ。

「来ないね……」

「だな……」

二人が退屈そうに呟いた時だった。

「お前たちがアレックス・レイヴァンダートと、レナ・アウインダーか……」

一人の女性が待ち合い室に入ってきた。長い黒髪を一つに結び、乱れなくスースを着た女性だ。年齢は、アレンと同じか下くらいだろう。ちなみに、アレンは26歳。レナは18歳である。

「アンタは？」

「アレックス。お前のオペレーターとして就任した、セレン・ヘイズだ。」

アレンの問いに、女性。セレンはきつちじと答えた。

「うわっ。アレンと正反対だ……」

「お前もだら。」

驚きの声を上げるレナに、アレンはツッコミをした。

「何よそれえ！」

「事実だろ。」

アレンとレナは互いにくだらない口喧嘩を始めた。  
その様子を見て、セレンは思わず溜め息をついた。新たに配属さ  
れたアレックスというリンクス……

本当に、大丈夫なのだろうか……

## カード、入隊（後書き）

アーマード・ゴッドこの世界観に合っていないのは自覚しているや...

ラインアーケ襲撃（前書き）

タイトル通り（・・・）

## ラインアーケ襲撃

「アレックス、早速仕事だ。」

口喧嘩が収まつた所で、セレンは口を開いた。

「仕事?」

「まさか、それでカラードを待ち合わせにしたのですか?」

二人はそれぞれ反応する。アレンはめんどくわうて、レナは驚愕して。

「そうだ。ブリーフィングに行くぞ。」

セレンは足早と出でていったので、アレンたちも着いていった。

\*

アレンの初仕事は、企業からの依頼。内容はラインアーケの襲撃であった。ブリーフィングでの内容は、ラインアーケの主戦力、「ホワイト・グリント」が別任務での活動中に、ラインアーケの守備戦力を殲滅することであった。

なぜ、ラインアーケを襲撃するか。それは、ラインアーケがプラネットフォーム、クレイドルを反対しているからである。企業側も何度も交渉をしているらしいが、それでもダメらしい。故に、強行手段に出たようだ。

(なんで、あんなにこだわるんだ……?)

アレンもクレイドルを心良く思っていない。と皿つよつ、めんどくさいことに上にさりでもいいという感覚だ。

「アレン、初仕事頑張ってね あたしも、ブルーアイズの出撃準備をしなややー。」

アレンの一言を置いた後、レナはブリーフィングルームから飛び出した。

「もう少し落ち着くことが出来ないのか？彼女は……」

落ち着きのないレナに、セレンは溜め息をつく。

「やがましこのが取り柄だからな……。俺も行くわ。めんどくさいけど……」

アレンも、本当にめんどくさいブリーフィングルームから出た。

「はあ……」

めんどくさがり屋のコンクス、落ち着きのない整備士……

先が思いやられる……

セレンも、職場の管制室に向かつた。

\*

わかつているのだろうな、アレックス……

「わかつてゐる。ラインアーケに配属してゐるMT及びノーマルの撃破。だろ？」

ブルーアイズのコクピット内。アレンはセレンと最終確認を取つていた。

漆黒のネクスト、ブルーアイズ。重量一脚型のその機体は、射撃を中心とした武装だ。右腕にはアサルトライフル。左腕にはレールガン。背中には、ミサイルとガトリング砲が装備されている。また、各武装の弾切れも想定しているのか、右腕にはパルスガン。左腕にはレーザーブレードが格納されている。

そして、ブルーアイズの左肩には、各自が赤と青の瞳を持つ一対のユニコーンであった。

ミッション開始するぞ。

「了解。」

ブルーアイズを運んでいた輸送機が、ラインアーケ付近にブルーアイズを投下した。

\*

「さて。さひさと終わらせるか……」

アレンは、ブルーアイズを加速させた。レーダーに、MTの熱源が映る。

アレンは、武器を装填してミサイルを構える。そして、そのミサイルをMT達に放つた。

アレは、ネクスト！？

くそ、こんな時に！！

戦力の要たるホワイト・グリントがいないからか、パイロット達の焦りを感じる。でも、そんな相手に向けて加減する程アレンは甘くない。いや、加減するのがめんどくさいのだけかもしれない。アレンはただ黙々と、レーダーに映る敵を殲滅していった。

目標、残り約半分。

ノーマルはまだか！？ノーマルは！！

セレンの声とパイロットの声が入り乱れる。でも、残り半分ならば問題ない。

ブルーアイズは、ミサイルからアサルトライフルに装填させ、M Tを撃ち落とす。向こうも攻撃してくるが、コジマ粒子の防御壁、<sup>プライマルアーマー</sup>P Aで防ぎきれる。例えP Aが無くとも、ブルーアイズの重装甲の前では、M Tの攻撃は小鳥が突つつく程度だ。さほど気にする必要はない。

ふとレーダーに目をやると、熱源が増えている。おそらく、ノーマルの反応だろう。ブルーアイズは、ノーマルが出現した方向に向かった。

\*

「腕は確かにようだな……」

ブルーアイズの動きを見て、セレンは呟く。重装甲とは思えない俊敏な動き。それは、アレンの反応や勘が鋭い事を意味する。

重装甲はその重さによって、機動力に欠けているのが弱点だ。パイロットの瞬間的判断がなければ、武装が豊富でもただの金属の塊だ。

自分の攻撃は当たらなければ意味がない。敵の攻撃は当たつては意味がないのだから……

「よし。ミッショーンは……」

「新たに熱源確認！ランク9バーナード・エルスレッドのホワイト・グリント！」

索敵手の声に、セレンは驚愕した。

\*

「終わりか……」

アレンは一息をつく。たががMTとノーマル相手だつたため、弾はあまり使わなかつたが……

アレックス！すぐに離脱しろ！ホワイト・グリントが来る！  
「ホワイト・グリントが！？」

瞬間、ミサイルの熱源をレーダーが感知する。アレンは直ぐ様両肩からフレアを放つてミサイルの炎を回避した。

まさか、お前が企業に入るとはな……。アレン  
「バーナード……」

ラインアーケに、純白のネクストと漆黒のネクストが対峙してい  
た……

**ラインアーケ襲撃（後書き）**

ホワグリのアンノウンはオリキャラにしました（・・・）

青に双眸▽白に閃光（前書き）

まさかの白黒との戦い。

## 青い双眸▽S白い閃光

漆黒のネクスト、ブルーアイズ。白銀のネクスト、ホワイト・グリント。二機は未だに、一步も動かさずにいた。だが、二機共武装は構えており、リンクス達もしつかりと前を見据えていた。この図はさながら、侍同士の戦いの場にも見える。どちらかが動けば、一気に攻める。互いの隙を探り合っているのだ。

アレン……。まさかこうして、お前と戦う事になるとはな……  
「バーナード……。その言葉、そのまま返すよ……」

ホワイト・グリントのリンクス、バーナード・エルスレッドが残念そうに語る。アレンも、心境はバーナードと同じだった。

クレイドルからネクストを強奪して脱走したアレンは、ただただ迷っていた。その時に、ラインアークにのフィオナ・イフェルトに拾われたのだが、全く馴染めずにいた。数年経つて、ちょうどリンクス戦争直前に目の前にいるバーナードに出会った。

当時のバーナードは、AMSの適性が最低ながらも、何とか戦い続けていたレイヴンであった。しかし、彼の人柄が多くの人々を包み込んだ。アレンも、彼の人柄に包み込まれた一人だ。

バーナードが現れたお陰で、アレンはフィオナ以外の人間にもなつくなってしまった。

だが、リンクス戦争がそんな一時の幸せを破壊された。

リンクス戦争終結時に、バーナードが右目を怪我して生還したのだ。まだ幼さが残っていたアレンには、その現実が耐えられなかつた。

『気にはんなアレン。これで、俺とお前はお揃いだ。』

バーナードはそう言いながら笑っていた。でも、アレンは嬉しくとは思わなかつた。

逆に、「戦わなかつた自分」を呪つた。戦うための力はあるのに、また人を殺してしまったことに抵抗を覚えて、その力を使わなかつた。そんな自分が許せなかつた。

だから、ラインアークから飛び出した……

アレンは、しつかりと前を見据えた。有視界回線で会話をしているため、相手と自分の顔は互いに確認出来る。

アレンの目の前には、ヘルメットで顔を遮られてよくは見えないが、それでも、自分と同じように。いや、正確には自分が勝手に相似たのだが、バンダナで前髪を上げ、右目は傷を負っている。見ない内に少し老けてもいた。

向こうも右目は見えない。条件は同じ。

頼りになるのは、自分の腕と愛機だけだ。

幸い、ホワイト・グリントは任務帰りだ。証拠に、両手で構えているはずのアサルトライフルとライフルが、片方だけになつていて、どちらかが弾切れしてページしたのだろう。だが、背中のミサイルはページしていなかつた。

それでも、武装面ではブルーアイズが軍配有利だつた。アサルトライフルはまだ半分以上残つていて、ミサイルやガトリング砲も半分は残つている。レールガンに関してはこの戦いでは一度も使用していない。

それでも、勝てる自信は無かった。アレンの動きはバーナードの動きである。性能上、ホワイト・グリントの機動力を上回る事は不可能だ。それでも、戦うしかない……

何迷つていやがる！アレン！

バーナードの叫び声で、アレンは現実に引き戻された。だが、それは既に遅かった。ホワイト・グリントのミサイルが放たれていたからだ。今からフレアでは間に合わない。アレンは装填していたガトリング砲とアサルトライフルでミサイルを撃ち落とした。だが、その爆風からホワイト・グリントが現れた。いや、爆風にホワイト・グリントが突っ込んだのだ。

至近距離の接近を許してしまったブルーアイズは、ホワイト・グリントの突進を真っ正面から喰らった。

だが、ホワイト・グリントの突進はそれだけでは終わらなかつた。ホワイト・グリントのブースターが展開されていく。<sup>オーバードライブ</sup>OBだ。OBの推力を得たホワイト・グリントはブルーアイズを押し始めた。いくら重量のあるブルーアイズでも、OBの推力を前にしては、留まるることは難しかつた。

「ぐつ、うう！」

PA同士の摩擦。ブルーアイズの脚部と道路との摩擦が機体全身を震わせる。無論、その衝動と、出来るのならば、耳を塞ぎたいくらいの金切音がコクピットにも伝わる。

そして、ガコンッ！と音と同時に、アレンの視点が目の前のホワイト・グリントではなく、ラインアークの建造物となつた。だが、それはたつた一瞬で、次の瞬間では大きな水音と振動がコクピットに伝わつた。

\*

「アレックス！ 応答しろ！ アレックス！！」

セレンは叫び続ける。今、ラインアーチではホワイト・グリントとブルーアイズが戦っていた。最初は停滞していたが、ホワイト・グリントが先制してミサイルを放つた。それをブルーアイズが慌てながらミサイルを撃ち落としたが、その一瞬の隙を狙って、ホワイト・グリントが突撃。OBを使って、道路に立っていたブルーアイズを押し出して海に落としたのだ。

「アレックス！アレックス！」

セレンは叫ぶ。初仕事でいきなり水没？冗談じやない！

「アレックス……」

めんじくをやうでまなく、苦しそうにアレンが答えた。

「まだいる。お前が浮上するのを待つているようだ……」「

アレンの問いに、セレンは的確に答える。現に、ホワイト・グリントはブルーアイズが落ちた地点の空中で待機している。本来なら撤退してもおかしくはないが、やはり雑草は根元まで刈り取りたいようだ。

「アレックス、そのまま海中を使って離脱し  
OK。まだいるんだな……」

セレンは計器に手をやると、沈んでいたブルーアイズが、海面に近付いていた。

「バカ野郎！なにを……！」

一発やられたらやり返す。それが、俺たちのルールなんですね……

計器には、ブルーアイズが海上に浮上したのを示していた。

\*

「来やがつたな、アレン！」

ブルーアイズの浮上に、バーナードは笑っていた。ラインアーケークから飛び出して行ってから数年。それでも、アレンは約束。ルールを覚えていた。

一発やられたらやり返す。アレンと決めた男同士のルール。たまに度が過ぎて、フィオナに一人で叱られたのが良い思い出だ。

それでも、バーナードは躊躇いもなく全ミサイルをブルーアイズに叩き込ませる。浮上したばかりのブルーアイズは対処出来なかつたのか、そのままミサイルの爆発に巻き込まれた。そして、ホワイト・グリントは空となつた武装をパージした。

(待て……。ミサイルだけであんな爆発起きたか?)

バーナードは田の前の爆発に疑惑を感じた。ミサイルだけの爆発にしては、派手すぎるのだ。まるで、誘爆を起こしているような……

(誘爆……！？まさか……！…)

バーナードが気付いた時には遅かった。ちょうど右斜め前からブルーアイズが突っ込んで来ていた。背中の武装。もとい、全ての武装がページされていた。残っているのは、ブルーアイズの左腕から光を出しているレーザーブレードだけ……

「クピットのアラートがうるさく鳴り響く。そして、右側から衝撃を受けた。何かと皿をやれば、ホワイト・グリントの、ライフルを持っていた右腕が胴体から離れて海に向かって落ちていくところだつた。つまり、ブルーアイズのレーザーブレードがホワイト・グリントの右腕を切り落としたのだ。

(考えたな、アレンのやつ……)

ミサイルの盾に、自らの武器を投げ出す。しかも、レーダーが計測出来ないくらいの熱量を出すために全ての武装を投げ出してまで。そして、爆風の勢いを利用して海中に潜み、軽くなつた機体で一気に懷に飛び込む。リスクは高いが、アレンはそのリスクを踏み越えた……

「ひゅあホワイト・グリント。戦闘続行不可能。撤退する。」「

バーナードは、〇Bを吹かせてブルーアイズから離れた。

(見ねえ内に強くなつたな。アレン。今回は、負けを認めるぜ……)

敗北したというのに、バーナードは笑っていた。

\*

「はあ、はあ……」

ホワイト・グリントが作戦エリア外に出たのを確認すると、アレンはヘルメットを脱ぎ捨てた。汗が髪や顔を伝つ。こもつていた熱気も少しは解放出来た。

ホワイト・グリントの右腕を切り落とすとは、とんでもバカがカラードに来たな……

「うるせえ。つーか、もうあんな面倒なのは御免だ……」

セレンの眩きに、アレンは愚痴る。本当に[冗談じゃない]。この後、弾薬費だの何だのの話、レナからの説教が待つていて。

それでも、戦いの場であつたとはいえ、恩師と再会出来たのはとても喜ばしい事だった……

輸送機がブルーアイズを回収したのかどうかはわからないが、ゆっくりと引き上げられる感覚を回収作業だと信じて、アレンはそつと瞳を閉じた。

余談だが、このミッションでの報酬は、ホワイト・グリントの帰還と言う予期せぬ状況でありながら、その右腕を切り落とすという荒業が評価され、弾薬費は引かれたが追加報酬がプラスされて、本來より少し多めの報酬を貰つた。

だが、ブルーアイズに無茶をさせたという事で、アレンはレナから説教を喰らつたと言ひ。

青い双眸×白い閃光（後書き）

はい。AC4を未プレイのため、白栗のパイロットの性格はああな  
りました（・・・）

すみません…… m(— —) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0224ba/>

赤と青の双眸を持つ一角獣

2012年1月8日21時51分発行